



ROUND 1 GRAND CHAMPIONSHIP BOWLING 2023 FINAL

11月11日
ラウンドワンスタジアム堺中央環状店

「気持ちをボールに込めたと、魂の熱闘だった川添



レギュラー部門

川添奨太と名和秋が崖っぷちで踏ん張る

レジェンドたちも輝きを放つ

コロナ禍で3年間中断していたラウンドワンカップが4年ぶりに帰ってきた。JPBA、JBC、NBF、各団体の予選、決勝大会を経て、男女レギュラー部門(年齢制限なし)とアクティブジェネレーション部門(50歳以上)は、各団体8名ずつの24名、グランドジェネレーション部門(65歳以上)は各6名ずつの18名がこの日のFINALに集結し熱戦を繰り広げたが、JPBA勢が6部門中5部門を制し、プロの面目を保った。(共催: JPBA/JBC/NBF 特別協賛: 株式会社ラウンドワン)



▲プレッシャーから解放されて号泣の名和

レギュラー部門

予選は各団体1名ずつが同一BOXに入り3Gを投球、上位1名が決勝トーナメントに進むが、Aシフトの4名のプロは男女とも全員が敗退、JPBAにとっては暗雲が垂れ込めていた。

そんな危機を救ったのが、男子では川添奨太だった。Bシフトで藤永北斗とともに決勝トーナメント(2G先取制)に進出。1回戦をストレートで勝ち進んだ川添は、2回戦(準決勝)は1回戦で藤永に逆転勝ちで上がってきた福満亮選手(JBC)と対戦。1G目279を打った福満選手に完敗すると、2G目前半は劣勢の展開。「正直負けたと思った。でも最後までやれるだけのことはやろうと…」ボールをウレタンからリアクティブに、さらにウレタンに戻す苦心の投球。福満選手が変化してきたレーンに後半もたついたこと



▲ほぼ右腕1本の独特の投法で準優勝の村永選手「川添プロは最強でした」



▲「楽しく投げられました」と、表情豊かなバフォーマンスの鈴木選手

もあって216:204で取ると、3G目は280:214と圧倒した。

優勝決定戦の相手は、斉藤翔選手(JBC)との準決勝最終G、217:215と2ピン差で制して勝ち上がった村永一樹選手(NBF)。1G目、中盤以降に2つのターキーで219:174と先勝した川添が、2G目も256:177と快勝して、2021年のJPBAプレイヤーズドリームマッチ以来丸2年ぶりの21勝目を挙げた。

女子のプロでは、Bシフトから名和秋と寺下智香が決勝トーナメントに進んだが、1回戦でいきなり当たる組み合わせの皮肉。その対戦は、1Gずつを取り合ったあとの最終G、名和が269:233で制した。さらに名和は、準決勝は大槻絵里子選手(JBC)をストレートで下して優勝決定戦に進んだ。反対のゾーンからは、鈴木波流選手(JBC)が、予選で800シリーズ(279・268・257)を打った石本美来選手(JBC)との準決勝を、2G連取で優勝決定戦に進んだ。

優勝決定戦前の練習ボールは「本当にわからなくてパニックでした」と名和。しかし難しく感じていたのは鈴木選手も同じだったかもしれない。一進一退の展開で迎えた終盤、名和が8フレから値千金のターキーで197:180と先取した。2G目は鈴木選手が7フレからのダブルで並びかけると、名和の8フレは④⑩と割れてオープン。一気に突き放したい鈴木選手の9フレは「失投ではないけど、ちょっと気合が入りすぎたかな」と痛恨のビッグファイブ。

カウントダウンも響いて、名和が183:178で連取、2015年の宮崎プロアマオープン以来8年ぶりの4勝目を挙げた。

アクティブジェネレーション部門

男子は現在71歳ながら、あえてグランドジェネレーションではなくアクティブジェネレーション部門にエントリーした酒井武雄が、優勝決定戦では危なげない戦いぶりで西本邦彦選手(JBC)を236:195で下し、通算タイトルを37に伸ばした。「この数年は藤井信人や所属センターの佐藤貴啓ら若いプロにもアドバイスをもらいながら取



▲本来のカテゴリーでなくアクティブジェネレーション部門での優勝はさすがの一言の酒井



▲「アマで唯一の優勝と聞かされて、あとからドキドキしてきました」と大久保選手

り組んできた」と、飽くなき向上心に感服だった。

女子は柴村尚美と、今年プロデビューの大久保雄矢の母親でもある大久保幸江選手(JBC)の優勝決定戦となった。3つのオープンなどで160に終わった柴村を、195とまとめた大久保選手が制して、6部門中唯一のアマ優勝者となった。「自分のボウリングをして負けたくらいがないと思っていたら、まさかの優勝までできました」

グランドジェネレーション部門

1回戦を勝ち上がった3名で準決勝1Gを投球、上位2名が優勝決定戦を行った。

男子は準決勝を1位で勝ち抜けた長谷宏が、2位通過の宮原達郎選手(JBC)と対戦、1フレから6連発を決め、終盤はもたついたが235:210で快勝した。「この部門の優勝もタイトルに認め



▲2005年の栃木オープン以来18年ぶりのタイトル獲得となった長谷



▲「この1勝は気恥ずかしい気もするけど、貴重な1勝ですね」と75勝目の斉藤

られることをわかっていなかったのうれしいね」と、通算7勝目を喜んだ。

女子の優勝決定戦は、通算74勝の斉藤志乃ぶと15勝の加藤八千代というオールドファンにはたまらない顔合わせとなった。加藤がカウント有利で迎えた10フレ、ワッシャーを残すと、カバーならずオープン。1投目ストライクを持ってきた斉藤が177:174と3ピン差で制し、74で止まっていたタイトルに1つ上乗せした。「悲しいかな、肉体はうまく表現してくれないけど、加藤さんとの対戦でお互いの息づかいを感じながら、やっぱりドギマギもするし、昔を思い出しました。ゲームの進め方も内容も加藤さんの方がよかったです、よもやの1勝です」

今月の表紙

男子レギュラー優勝・川添奨太

自分でJPBAを背負う必要はないのかもしれないけど、こういう大会を開催してもらっている以上は、やっぱりプロが目立たないといけないなと思う。とくに今回はナショナルチームの子が多かったので、負ければプロよりナショナルの方が上じゃないかって思われかねないので、プレッシャーを感じながら戦っていた。だからホッとしたというのが正直な気持ち。今年は調子は悪くないのに、勝ち切れない歯がゆさがあった。変に冷静になりすぎていた部分があると思うので、今回は気持ちを込めて投げたが、それがピン

に伝わってくれたのかな。20勝の目標を達成したから、勢いなくなったんじゃないかとか、いろんな声が聞こえてきたけど、自分では20勝で満足していないし、目標はもっと上に置いている。

優勝ボール: ROTOGRIPジェム・クリスタル

女子レギュラー優勝・名和秋

1週前のジャパンオープンの内容があまりにひどくて、帰ってから同じセンターの市原竜太プロに見てもらいながら、猛練習をした。少しは上向きでこの大会を迎えたけど、Aシフトの結果を見たら胃がキリキリして大変でした。優勝決定戦には、1回戦で対戦した寺下プロやみ

んなの思いを勝手に背負って臨みました。1ゲーム目のターキーは、持ちすぎで裏まで行っただけあって勢いもあつたので、最終ゲームまでいきたくなかった。今とフォーマットは違うけど、2013年のラウンドワンカップを勝っていて、私の4勝のうち半分の2勝、しかもどちらも賞金400万円で、ラウンドワンさんに足を向けて寝られないですね。

優勝ボール: 900GLOBALエタニティ・パイ